

アルチャタの「知覚判断説(1)」
—*Hetubinduṭīkā* 研究(5) (pp. 21, 11—23,11)—

乗山 悟

和訳 (承前)⁽¹⁾

知覚判断説

HBT 21,11⁽²⁾

ここですでに説かれたように<論証されるべき基体>に<主題の属性> [が存在すること] が直

⁽¹⁾ 本稿は、ダルマキールティ (Dharmakīrti ca. 600-660) の *Hetubindu* (『論拠一滴論』 abbr. *HB*) に対するアルチャタ (Arcaṭa ca. 710-770) の注釈 *Hetubinduṭīkā* (『論拠一滴論複注』 abbr. *HBT*) の和訳研究であり、以下の拙稿に後続するものである。略号、翻訳方針などはこれらに従う。

・乗山悟「アルチャタの「推論の解明」—*Hetubinduṭīkā* 研究(1) (pp. 1-5)—」、『インド学チベット学研究』3号 (1998年)

・乗山悟「アルチャタの「綱領偈」解釈—*Hetubinduṭīkā* 研究(2) (pp. 6 - 11, 3)」、『インド学チベット学研究』4号 (1999年)

・「アルチャタの「主題所属性論」—*Hetubinduṭīkā* 研究(3) (pp. 11, 4 - 17, 23)—」、『インド学チベット学研究』9/10号 (2006年)

「アルチャタの「遍充論」—*Hetubinduṭīkā* 研究(4) (pp. 17, 21-21, 10)—」、『インド学チベット学研究』, 13号 (2009年)。

⁽²⁾ 以下の箇所は *HBT* の版本では、< 12. 「判断を伴わない [認識] が、どのようにして一般相を把握するのか」というクマーリラの罵りに対する返答 > (nirvikalpaṃ katham sāmānyagrāhīti kumārīlākṣepasyottaram /) と分節されている。ここは *HB* 3.2 に対する注釈である。注釈対象の *HB* の訳文をあげる。

接知覚により確立することについて意図 (abhiprāya) を理解していない者＝クマーリラは、「なぜ判断を伴わない (avikalpa) 直接知覚により普遍を本質とする煙などの証相の自体の形相 (svarūpa) の把握も同様に可能であるのか？あるいは、基体におけるこれら両者の [保持されるものと保持するものを特徴とする] 関係を把握すること⁽³⁾ はいったい何によるのか？」と反論した⁽⁴⁾。

なぜなら彼 [=クマーリラ] によって⁽⁵⁾ 「そして、推論などは直接知覚を前提とする故に<ダルマ>に関して、[それを認識する] 原因ではない (animitta)」というこの『(シャバラスヴァーミンの) 注釈』^{1 (6)}が、

¹チベット訳はサンスクリットテキストとの単語の出入りはみられないようであるが混乱しているように思われる。
De.194a2; Pek.239b3: དེས་ན་མངོན་སུམ་ཐོན་ཏུ་སོང་བ་དང་རྗེས་སུ་དཔག་པ་དང་ག་བ་ལ་སོགས་པའི་ཚོས་ཀྱི་རྒྱ་མཚན་ཡིན་ནོལེས་ནས་བཤད་ཅེད་པས།

実に、煙が存在し他の対象から区別された (vivikta) 形相をもつ場所を非共通なるものとして直接知覚によって (すでに) 見た人には、見られた通りであり個別を対象とする想起を介する論証因の認識が発生する。
(sadhūmaṃ hi pradeśam arthāntaraviviktarūpam asādhāraṇātmanā dṛṣṭavataḥ pratyakṣeṇa yathā dṛṣṭabhedaviṣayam smārtaṃ līngavijñānam utpadyate /)

⁽³⁾ 直接知覚の対象は独自相でありそれは基体と属性 (dharmin, dharma) に分割し得ない単一なるあり方であるとするダルマキールティの理解を念頭に置いた反論と考えられる。

ドゥルヴェーカミシュラは次のように注釈している：

HBTA 265,26: tayoh sambandhasya ādhārādheyalakṣaṇasya grahaṇam / (「これら両者の関係を」[つまり]「保持するものと保持されるものを特徴とする関係を」を把握することということである。)

⁽⁴⁾ ドゥルヴェーカミシュラの注釈に従った和訳である。

HBTA 265,25: dharmiṇo vā svarūpagrahaṇam api tāvat katham yujyate ity eva yojyam / (あるいは基体における自体を把握することも同様にどうして可能であろうか？とこそ結びつけられるべきである。)

チベット訳もこの方向で理解している。

De. 194a1; Pek. 239b2: ཇི་ལྟར་སྤྱི་བདག་ཉིད་ [Pek. inst. ཀྱི་] ཏུ་བ་ལ་སོགས་པའི་རྟགས་མངོན་སུམ་ཏུ་རྟོགས་པ་མེད་པ་ལས་ཡིན། རང་གི་འོ་འཛིན་པའས་ཚོས་ཅན་ལ་ཡང་དེ་ཅུ་ཞིག་ཉེ་བར་སྤོར་བ་ན་འདི་དག་གི་ [Pek. གིས་] འབྲེལ་པ་གང་གིས་འཛིན་པ་ཡིན་ ...

⁽⁵⁾ ドゥルヴェーカミシュラは以下のように注釈している。

HBTA 266,1: evam asau pratyavastha iti katham jāyate ity āśaṃkyāha tena hīti / hir yasmāt tena kumārīlena / (「このように彼 [=クマーリラ] が反論したとどうしてわかるのか？」という疑義を受けて、「なぜなら彼によって」と [アルチャタはいう]。「なぜなら」とは「~故に」、「彼によって」とは「クマーリラによって」という意味である。)

⁽⁶⁾ ミーマンサー学派によれば、直接知覚が<ダルマ>を認識できないのは、過去や未来そのほか感覚では理

感官知が記憶という力能を持たないことから判断を伴わない⁽⁷⁾ 場合、どうして推論などが⁽⁸⁾ 直接知覚に基づくものとなり得ようか？ [なり得ない。]

解できないからである cf. *Śbh* 1.1.2

アルチャタがここで引用する文章は、『シャバラ注』の中にそのままの形で見出すことはできないが、『ミーマーンサー・ストトラ』1-1-4 に対する注釈箇所の中に内容的にほぼ一致した記述を指摘しうる。

Frauwallner[1968]:pratyakṣam tāvad animittam / kim kāraṇam ? evaṃlakṣaṇakam hi tat: satsamprayoge puruṣasyendriyānām buddhijanma tat pratyakṣam / satī indriyārthasambandhe yā puruṣasya buddhir jāyate, tat pratyakṣam / bhaviyaṃś caiso `rtho na jñānakāle `sti / sataś caitad upalambhanam, nāsataḥ / ataḥ pratyakṣam animittam / buddhir vā janma vā samnikarṣo veti naiṣāṃ kasyacid avadhāraṇārtham etad sūtram / saṃdriyārthasamprayoge, nāsati ity etāvad avadhāryate / anekasmin avadhāryamāṇe bhidyeta vākyam / **pratyakṣapūrvakatvāc ca anumānopamānārthāpattiinām apy akāraṇatvam** / (まず感官知は原因でない。なぜか？ なぜならそれは次のような特徴を持つからである。(すなわち)「存在するものと結びついた時、人間の諸感官に知覚が生ずる。それが感官知である。」感官と対象との結合がある時、人間に知覚が生ずる。それが感官知である。そして(感官知で)認識する時には未来の対象は存在しない。そして存在するものをその(感官)は知覚するが、存在しないものは(知覚し)ない。だから感官知は(＜ダルマ＞の認識の)原因ではない。この経は、「知覚」あるいは「生ずる」あるいは「接触」のうちのどれをも(＜ダルマ＞の認識の原因として)確定するためではない。感官と対象との結合が存在する時であって存在しない時にはない、ということだけが確立される。多くのことが確立されつつある時には文章が分裂するだろう。また、**推論**・類比・意味の含みもまた**感官知に基づいているから原因でない**。... (強調部分は筆者による))

ここでいう＜ダルマ＞は、『ミーマーンサー・ストトラ』1-1-2 で説かれた内容に関するシャバラスヴァーミンの理解を前提としており、またクマーリラも同じ事柄を述べているとドゥルヴェーカミシュラは指摘している。

HBTA 266.2: jyotiṣtomādeḥ śreyaḥsādhanaṭvam dharmo bodhavyaḥ / yad āha śabaravāmi “ko dharmo yaḥ śreyaḥsādhanaḥ” iti / ata eva kumārilo `py āha “śreyaḥsādhanaṭvāpy eṣāṃ nityaṃ vedāt pratīyate” iti / jaiminisūtre śabaravāmiyam etad bhāṣyam / etad bhāṣyam iti cārthadvāreṇoktam / na tv idrṣa eva bhāṣyagranthaḥ / (＜ダルマ＞とは、ジョーティシュトーマ(光の称賛)[祭]などが、至福をもたらすことのように理解されるべきである。「＜ダルマ＞とは何であるか？ 至福をもたらすものである」(*Śbh*1-1-2)とシャバラスヴァーミンがいったこの同じことについてクマーリラも「これらが至福を達成する手段であることも常にヴェーダから知られる...」(*ŚV* 2-14)といった。(アルチャタがここでいう)「この『注釈』」とは *MS* に対するシャバラスヴァーミンのものである。また実質上「この注釈」といったのであるが、(シャバラスヴァーミンの)注釈の文言が(そのままの形でアルチャタの文章に)与えられているわけではない。)

⁽⁷⁾ ドゥルヴェーカミシュラによれば、「判断を伴わない」というのは「構想を欠く」ということである。

HBTA 266.8: nirvikalpā kalpanāsūnyā indriyasya dhīḥ / (感官による覚知が判断を伴わないというのは、構想を欠くということである。)

⁽⁸⁾ ドゥルヴェーカミシュラは、次のように説明している。

ŚV 4-87

[判断がなければ、なぜこのように把握されることがないのか？ といえど⁽⁹⁾]そして、判断することなしに、証相と [証相の] 基体と [両者の] 関係との¹ 把握はない。同様に、...⁽¹⁰⁾

ŚV 4-88

と [推論は直接知覚に基づくことができないと] 批判され、

¹ HBT 21,20: “na cāvikalpyaliṅgasya dharmisambandhayos tathā...” を、De. 194a3; Pek. 239b5: “རྟགས་དང་ཚོས་ཅན་འབྲེལ་པ་
དག་དེ་ལྟར་རྟགས་[རྟག] པ་མེད་པས་...” に従って、“na cāvikalpya liṅgasya dharmisambandhayos tathā...” と訂正する。

HBT 266,6: pramāṇasyeti vivakṣāyām anumānādina iti nirdeśaḥ / (HBT の「プラマーナが...」と言いたくて
ŚBh では「推理などは...」と説明したのである。)

⁽⁹⁾ この補いは、ドゥルヴェーカミシュラによる

HBT 266,10: vikalpanam antareṇāpi kathaṃ na tathā grahaṇam ity āha na ceti / (「構想なしにもなぜこのよう
に把握されることがないのか」という [反論に対してクマーリラは] 「そして、～ない」といった。)

⁽¹⁰⁾ 原文をあげる:

kathaṃ pratyakṣapūrvatvam anumānādino bhavet ? /
yadā smrtyasamarthatvān nirvikalpendriyasya dhīḥ //

na cāvikalpya liṅgasya dharmisambandhayos tathā /
grhīḥ (HBT 21,18f.)

HBT 版本でも指摘されているように、ŚV 知覚章からの引用である。本稿の和訳はあくまでもアルチャタの解釈に従ったものである。戸崎 [1993] に引用された ŚV の中でのテキストおよび和訳は次のとおりである:

kathaṃ pratyakṣapūrvatvam anumānādino bhavet /
yadā smrtyasamarthatvān nirvikalpendriyasya dhīḥ //87//

na cāvikalpya liṅgasya liṅgīsambandhayos tathā /
grhīḥ [upamāne 'pi sādṛśyagrahaṇāt smrteḥ] //88//

(反論:) 感官知 (=知覚) が、想起する能力をもたないから、無分別であるとき、どうして「推理などは知覚にもとづく」(と言える) だろうか？

実に (推理は) 立証因や立証される事柄や (それら両者の) 関係の把握 (にもとづくが、そのような把握) は分別することなしにはあり得ない。(別言すれば、無分別知にはそのような把握はない。したがって推理は、無分別知である知覚にもとづくものでありえない。) 同様に類推も (知覚に基づくとはいえない。) なぜならば (類推は) 想起にもとづいて相似性を把握するから。

* サンスクリットテキストの波線は異同、[] 内は、HBT に引用されなかった箇所を示す。

その後、ふたたび、実在物が¹、<類>などといった諸属性を伴って知により確認される。それ [=知] も直接知覚であると一般に知られている。[だから推論は直接知覚に基づくことが可能である。]⁽¹⁷⁾

ŚV 4-120

HBT 22 と [クマーリラが] いうときには、「仏教徒の間でだけ [判断を伴わない直接知覚によって] 証相と基体とその関係が認識できないという特徴をもつこの過失があり、求めている者達 [=仏教徒] の間には、我々 [=ミーマーンサー学派] の判断をともなった直接知覚はない。」となる。

Pek. 240a 故に彼 [=クマーリラ] によって説かれた [まさに仏教徒たちの間では直接知覚によって証相などが把握されないという] 誤りを防ぐ為に [ダルマキールティは] 「実に煙が存在し...」などといった⁽¹⁸⁾。

これ [=「実に、煙が存在する場所を...」という言明] については、以下が全体的な意味である。直接知覚は、現前にあり²重なり合ったものとしての煙と場所などを [対象として] もち、またすべての同類・異類から排除された肯定的な姿としての煙などの独自相を [対象として] もち、固有の本質に確定しているから (svasvabhāvavyavasthiteḥ)⁽¹⁹⁾ あらゆるそのような諸能力は相互に

¹HBT 21,27 “vastudharmair” をチベット訳および ŚV 版本により “vastu dharmair” に訂正する。

²HBT 22,5: “purovasthitam” をチベット訳: སུབ་མཁོ་གསལ་བའི་... により “puro`vastitam” に訂正する。

(17) 原文をあげる:

tataḥ paraṃ punar vastu dharmair jātyādibhir yayā /
buddhyāvasīyate sā 'pi pratyakṣatvena sammatā // (HBT 21,27f.)

ドゥルヴェーカミシュラの注釈をあげる:

HBTA 266,21f.: tataḥ ālocanājñānāt paraṃ uttarakālam / punar aprathame / jātyādibhir viśiṣṭaṃ yayā buddhyāvasīyate sāpi na kevalam ālocanājñānam iti apīśabdaḥ /

(「その後」[つまり] 観照知の後の時間に、「さらに」[つまり] 再度、それにより、<種>などにより限定されたものが確認されるようなそれ [=知覚] も [直接知覚たるものとして] 是認される。] 「も」という言葉は、観照知だけがではない、という意味である。)

この偈は *TS* k.1288 にも引用されている。cf. 戸崎 [1991]

(18) ドゥルヴェーカミシュラの注釈に従って訳出している。

HBTA 266,26: tataḥ tasmāt / tena kumārīlena upadarśito yo doṣaḥ saugatānām eva pratyakṣeṇa līṅgādyagrahanām ity evamlakṣaṇas tasya pratividhānāya /

(故に [つまり] 従って、彼 (=クマーリラ) によって教示された「まさに仏教徒の間では直接知覚によって証相などが把握されない」というような特徴をもつところの誤り、これを防ぐために...)

(19) *PV* I k.40 からの引用句である。この偈頌の解釈をめぐるのは吉水千鶴子 [1999]、Hisataka Ishida [2011] などを参照のこと。

混じり合わない性質である故に¹、[直接知覚は] その能力より発生するあるがままのものに随順 (anu-√kr̥) しているので、肯定と否定 2 つからなる後の判断を発生させる⁽²⁰⁾。なぜなら、〈属性と属性保持者〉である〈煙と場所〉といわれる両者を、そしてその両者が重なり合っていることを「これはこうである」[と肯定的に]・「別様ではない」と[否定的に]判断させるのであるから。

知覚領受 (anubhava) の通りに付託した明瞭さ (adhyāsapātava) などと同時に作用する諸判断が発生するから、故に、直接知覚を基盤とする、属性と属性保持者の固有の形相の確定、そして関係の確定が完成する。

すなわち⁽²¹⁾、まさしくこの〈煙と場所両者の結合関係の確定〉であるところのものが「ここにこれがある」という決知 (adhyavasāya) である。そして、これが判断を伴わなくとも²すでに語られたとおりの仕方では知覚により実に引き起こされたものである。また、能依と所依として確立された 2 つの存在物とは全く別のものが能依・所依という特徴をもつ関係では決してない。[もし存在物とは別のものが関係であるとすれば、]それは直接知覚によって領得されない故に後に判断が生じる筈だ³。存在物であるものは、それと別のところでは遮蔽される故に。それゆえに、まさにこの同様に確立された二つの事物 (artha) に依拠してこの分別 (kalpanā) がまさに付与される (samāropita)。

[「もし、そのような 2 つの存在物とは別の [関係という] ものが存在しないのであれば、なぜ「これは両者の関係である」また「この 2 つは関係を持っている」という言説 (vyavahāra) があるのか」という[疑念]に対して[アルチャタは次のように]いった。⁽²²⁾

故に、「関係・関係を有するもの」という他の個物の対立と非対立によって「属性・属性保持者」として日常世界では言説が[なされる]。しかしながら最高の真実としてのもの (paramārthika) で

¹ HBT 22,8f.: "sarvasāmarthamātrāṇām parasparam asaṃkīrṇarūpatvāt..." をチベット訳: བསམ་ཅད་ཀྱི་རྒྱུས་པ་རྣམས་པན་ཚུན་གསུངས་པའི་འོ་བོ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་... により "sarvasāmarthamātrāṇām parasparam asaṃkīrṇarūpatvāt..." に訂正する。

² チベット訳は De.、Pek. とともに、「判断を伴っても」と訳しているが、採用しない。De.194b2; Pek.240a3: རྣམ་པར་རྟོག་པས་ཀྱང་མངོན་སུམ་གྱིས་ཇི་སྐད་དུ་བཤད་པའི་རྣམ་པ་གྲུབ་[འགྲུབ]་པ་ཁོ་ན་ཡིན་ཏེ་...

³ チベット訳には否定辞がない。De.194b3; Pek.240a8: མངོན་སུམ་གྱིས་ཉམས་སུ་སྤོང་བ་ལས་ཕྱི་ནས་རྣམ་པར་འགྲུབ་ཏེ།

⁽²⁰⁾ この部分は、文章が不自然に長くテキスト上の混乱があった可能性もある。ただしサンスクリット写本は版本と一致している。チベット訳も不明瞭でこれに基づいたテキストの訂正は困難である。さらにヴィニータデーヴァの注釈やドゥルヴェーカミシュラの複註に対応部分は存在しないように思われる。

⁽²¹⁾ ドゥルヴェーカミシュラによれば、この言明は次のような反論に対してアルチャタが答えたものである。

HBTA 267,21f: syād etat — sambandho 'yam iti niścayānanubhavanāt katham sambandhaniścayas tannibandhana ucyata ity āśaṃkāya tathā hīti

(このようであるかもしれない。 — 「これが関係である」という確定の領受がないからなぜそれを基盤とする関係の決定と言われるのか？)

⁽²²⁾ この補いはドゥルヴェーカミシュラによる。HBTA 268,1: yadi tathābhūtavastudvayād anyo nāsti tarhi katham "anayor ayam sambandhaḥ sambandhināu caitau" iti vyavahāra ity āha...

De. 194b

Pek. 240b

(「想起」とは、領得されたものを認識対象とする知識である。しかし、ここでこれ [=判断] は、それによって想起性があるはずの何によって領得された普遍を把握するのか?⁽²⁷⁾)

そこに顕現している異類が排除された姿である煙の形相は、普遍という姿を有するものとして直接知覚によってのみ把握される故に。

(【反論】異類が排除された独自相は直接知覚によって視覚されるが、排除は[視覚されない]のではないのか?⁽²⁸⁾)

異類の排除は、[異類が]排除された[独自相]と別ではない⁽²⁹⁾。なぜならば、排除についていかなる[排除]も直接知覚によって把握されないことになってしまうから。

だからすでに概観した様に(yathāparidṛṣṭam)、煙などの独自相(svalakṣaṇa)こそが他者の排除という性質によって判断される。故に、感知者(pratipattr)の決知により¹まさに想起がある⁽³⁰⁾。

判断は2つの部分を有するもの(dvividha)であり、直接知覚の後で発生するものであり、さらに実在物の対象を持たないものである。

このことから、[クマーリラなどが⁽³¹⁾]一般相とは知覚されたものではない(ananubhūta)[という前提]でいった:

¹HBT 23,5f.“pratipattradhyavasāyavaśāt”は、HBTA 268,26では“pratipattr adhyavasāyavaśād”となっている。但し、チベット訳はHBTに従いPek.240b6; De.195a1: “རྟོགས་པར་བྱེད་པ་ལོ་ཡང་ངེས་པའི་དབང་གིས་...”としている。

⁽²⁷⁾ ドゥルヴェーカミシュラの注釈による補いである。HBTA 268,21f.: anubhūtālambanam jñānam smṛtiḥ, atra tu sāmānyam kenānubhūtam ayam gṛhṇāti, yena smṛtitvam syād ity āha...

⁽²⁸⁾ ドゥルヴェーカミシュラによる補いである。HBTA 268,23: vijātyavyāvṛttam svalakṣaṇam pratyakṣeṇekṣitam, na tu vyāvṛttir ity āha...

⁽²⁹⁾ もし異類の排除と、排除された独自相を別とするならば異類の排除でない異類があると同時に異類の排除ではない同類もあることになるという不都合を回避する議論と考えられる。これはダルマキールティがアポーハ論を展開する際の大きな特色でもあった。このあたりの事情については片岡啓[2012]の言及を参照せよ。

⁽³⁰⁾ ドゥルヴェーカミシュラは、「すでに把握された外界対象を把握することとして<想起>といわれる」と説明している。HBTA 268,26: pratipattr adhyavasāyavaśād gṛhītābāhyārthagrāhitayā smṛtir ucyate,...

⁽³¹⁾ ドゥルヴェーカミシュラによる補いである。cf. HBTA 269,1. 「など」という言葉が誰を指すかについては不明である。

「[感官知と] 区別がないからこの認識は記憶に属する⁽³²⁾」と述べたがる人 [= 仏教徒] には、まさしく不妊女性の息子も記憶の能力を有している⁽³³⁾¹⁽³⁴⁾。

ŚV 5-4-160

というこのことも [ダルマキールティによって] 退けられたのである。

(未完)

¹ *HBTA* 269,3: yat smaraṇam tatra śaktatā sāmāthyam astu /と *ŚV*: ...vandhyāsute 'py asti nūnaṃ smaraṇaśaktatā //により “...asti nūnaṃ smaraṇaśaktato //” を “..asti nūnaṃ smaraṇaśaktatā //” に訂正する。

なお、チベット訳は訂正前のサンスクリットテキストの読みを支持している。 *De*.195a2; *Pek*.240b8: རེས་པར་དྲན་པའི་རྒྱས་པ་ཡིས། ། མོག་ཤས་བུ་ཡང་ཡོད་པར་འགྲུས། །

これに従えば、「記憶の能力により、確かに<不妊女性の息子>も存在するのである。」と和訳することが可能である。

⁽³²⁾ 「記憶に属する」とは「記憶という性質をもつ」ということである。 *HBTA* 269,2: smārtam smṛtirūpam...

⁽³³⁾ 仏教徒は、<不妊の女性の息子>のようになり得ない事柄について「記憶に属する」などと述べているという揶揄と考えられる。

⁽³⁴⁾ 原文は:

smārtam etad abhedena vijñānam iti yo vadet /
tasya vandhyāsuto 'py asti nūnaṃ smaraṇaśaktatā // (*HBT* 23,9f.)

《参考文献》(追加分)

- Erich Frauwallner[1968] *Materialien zur ältesten Erkenntnislehre der Karmamīmāṃsā, Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Süd- und Ostasiens* 6, wien, 1968.
- 片岡啓 [2010] 「三つのアポーハ説—ダルモッタラに至るモデルの変遷—」、『南アジア古典学』第5号。
- 片岡啓 [2012] 「言語哲学—アポーハ論」、『認識論と論理学』(シリーズ大乘仏教 第九巻)、春秋社。
- 戸崎宏正 [1991] 「クマーリラ著『シュローカヴァールティカ』第4章(知覚ストラ)和訳(4)」、『印度哲学仏教学』第6号 1991年。
- 戸崎宏正 [1993] 「クマーリラ著『シュローカヴァールティカ』第4章(知覚ストラ)和訳(3)」、『塚本啓祥教授還暦記念論文集：知の邂逅—仏教と科学編者 塚本啓祥教授還暦記念論文集刊行会』。
- ツルティム・ケサン(白館戒雲)、藤仲孝司 [2012] 『ダルマキールティ著『量評釈』第1章「自己のための比量」とタルマリンチェン著『同釈論解脱道作明』第1章の和訳研究』、研究プロジェクト「人の生老病死と高地環境-「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」研究報告書; 2011年度研究報告書、『チベット仏教論理学・認識論の研究』3。
- 乗山悟 [2000] 「Hetubinduṭīkāの知覚判断説」、『印度学仏教学研究』49-1。
- 吉水清孝 [1987] 「DharmakīrtiとŚāntarākṣitaに於ける語の意味と他者の排除」、『印度学仏教学研究』36-1。
- 吉水千鶴子 [1999] 「Pramāṇavārttika I 40の解釈について」、『印度学仏教学研究』47-2。
- 太田心海 [1987] 「法称と寂護のアポーハ説」、『印度学仏教学研究』24-2。
- Hisataka Ishida[2011] On the classification of anyāpoha, “Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis: Proceedings of Fourth International Dharmakīrti Conference, Vienna, August 23-27, 2005”.
- Pradyumna R. Vora, Shinkai Ota[1981] A TRANSLATION OF PRAMĀṆAVĀRTTIKA I AND SVAVṚTTI (2), 『佐賀龍谷短大紀要』27。

Arcaṭa, On Perceptual Judgement (1)

—An Annotated Japanese Translation of the *Hetubinduṭīkā* (5) (pp. 21, 11 – 23, 11)—

Summary

This is the fifth part of my annotated Japanese translation of the *Hetubinduṭīkā* (*HBT*), Arcaṭa's commentary on the *Hetubindu* (*HB*) of Dharmakīrti. It covers line 11 on page 21 to line 11 on page 23 of *HBT*. In this portion of *HB* Dharmakīrti refers to the perceptual knowledge of a logical mark in its locus as follows:

A perceptual-judgement-mediated knowledge of the probans, whose object is the particular as seen, arises in a person who has seen by perception in its uncommon form the smoky region, whose nature is excluded from other objects.

Arcaṭa comments this phrase at great length. He argues that a logical mark can be grasped by perceptual knowledge. He takes Kumāḷira for an opponent of this portion and quotes a few verses of *Ślokavārttika* of Kumāḷira. In this translation I generally refer to another commentary on *HB*, the *Hetubinduṭīkā* of Vinītadeva available only in Tibetan translation, as well as to the *Hetubinduṭīkāloka* of Durvekamiśra, which is a sub-commentary on *HBT*.

<キーワード> インド論理学, アルチャタ, 知覚判断, *Hetubinduṭīkā*, *Ślokavārttika*